

シンポジウム筆録

2019年度全カリシンポジウム

言語科目としての日本手話 — 10年のあゆみ

日時：2019年12月6日（金）18時00分～20時00分
場所：池袋キャンパス 7号館1階7102教室

基調講演「日本手話の言語性」

齊藤 くるみ 日本社会事業大学社会福祉学部教授
事例報告 細野 昌子 立教大学全学共通科目兼任講師（日本手話担当）
コメント 野崎 静枝 立教大学全学共通科目兼任講師（日本手話担当）

司 会：細井 尚子 立教大学全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー／異文化コミュニケーション学部教授

手話通訳：北川 光子 立教大学全学共通科目兼任講師（日本手話担当）
豊田 直子 手話通訳士

参加者：学内者、一般

細井（司会） 本日はお集まりくださりありがとうございます。はじめに、シンポジウムを主催する立教大学全学共通カリキュラム運営センター部長、社会学部教授の井川充雄よりご挨拶を申し上げます。

井川 全学共通カリキュラム運営センター部長の井川と申します。本日お渡しした資料「全学共通カリキュラム運営センター」のパンフレットの中に「言語系科目」の説明があり、「日本手話を自由科目として開講しています」と書いてあります。このように立教大学では、「日本手話」を言語系科目と位置付け、カリキュラムを展開して参りました。それが今年で10年の節目を迎えましたので、これまでの歩みを振り返って、今後のあり方についての議論を深めていきたいという趣旨でこのシンポジウムを開催しました。



井川 充雄



北川 光子



豊田 直子

本日はお忙しい中、基調講演・事例報告を引き受けてくださいました先生方に感謝申し上げます。また、本日は手話通訳を北川光子先生、豊田直子先生にお願いしています。短い時間ではございますが、どうぞよろしくお願いたします。

細井 (司会) それでは早速、斉藤くるみ先生に基調講演をお願いしたいと思います。斉藤先生は手話言語学がご専門で、ろう・難聴者の高等教育への機会拡充を目的とした「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」のマネジメントをされています。本日は、「日本手話の言語性」というテーマにて基調講演をお願いしております。斉藤先生よろしくお願いいたします。

基調講演「日本手話の言語性」

斉藤 くるみ (日本社会事業大学社会福祉学部教授)

手話が言語であることの理解の遅れ

私は1990年まで中世英語の研究をしていました。中世英語を研究して10年経った頃に手話と巡り合い、30年経ちました。12年前から、日本社会事業大学で「日本手話」を語学として教え、とくに教職課程の学生には、「日本手話」を必修にしています。

本日は「手話の言語性」についてお話ししたいと思います。まずは、本日はお招きいただき、ありがとうございます。「本日はお招きいただき、ありがとうございます」を、アメリカ手話では、手を口元から離して表現しますが、日本手話だと、「ありがとう」は、手の甲をもう一方の手で叩くように表現します。アメリカ手話と日本手話は、それぞれ違うことが分かります。



斉藤 くるみ

どのようなコミュニティでも自然に生まれるのが「言語」です。そして手話も他の言語と同じように、ろう者が複数いれば自然に生まれるものです。しかし日本では、まだまだ手話が言語として認められておらず、日本語に合わせて手話をしているのではないかとされています。

日本には、日本語対応手話の通訳もあります。この日本語対応手話と、「日本手話」が違うものだという事は、十分に理解されていません。「日本手話」は日本語を表現するものではないのに、「日本語の手話」とおっしゃる方がいます。それと同じように、「英語の手話」というものもありません。日本手話と日本語、アメリカ手話と英語は、まったく構造が違くと、今まで何千回も言ってきたのですが、「なるほどなるほど」といながら、喋っているうちに、やはり「日本語の手話」とか「英語の手話」という言葉が出てきて、なかなか手話が一つの「少数言語」であると理解してもらえないところがあります。最初に少しこのことについてお話をしたいと思います。

「日本語対応手話」と「日本手話」との違い

「日本語対応手話」は、「日本手話」とは異なり、日本語に合わせて行う手話です。「彼は彼女が好きだ」というのを「日本語対応手話」でやると、「日本語対応手話」の単語は「日本手話」から借りてきているので、「彼」「彼女」は、「日本手話」と同じ表現になります。「彼」「彼女」と、それに続く「は」「を」「好き」「です」という助詞や動詞を含む6つの記号を、日本語の語順のまま指文字で表現します。「日本語対応手話」では、「は」「が」などの助詞をすべて表現していると大変なので、助詞は外すことが多いです。すると、意味が通じないことが結構あるのです。そこが問題ですが、その分は、口話で補います。それは、難聴者と聴者（聞こえている人）が、喋っている日本語に手話をちょっとくっつけるような感覚です。悪いことではないのですが、でも、それは言語としての「日本手話」とは違います。そこを理解していただきたいと思います。

一方「日本手話」で、「彼は彼女が好きだ」をどう表現するかというと、「彼」「彼女」の順でもなく、「彼女」「彼」の順でもなく、「彼」と「彼女」を、同時に手話で表現します。そして「好き」という動詞と「指さし」（どっちがどっちを好きなのかを表す）、つまり「彼女／彼」「好き」「指さし」の3つの記号で表現できます。これを「日本手話」で、「彼は彼女が好きです」と日本語に合わせてやるのは至難の技です。英語で、「He loves her」と書きながら、「彼は彼女を好きです」と日本語で言うのは、難しいですよ。手が止まって、同時にはできません。「日本手話」と日本語の間にも、そうした違いがあることを、まず分かっていただけると思います。

また、例えば「日本手話」で「私の弟がテレビを見た」と表現すると、手話単語だけを覚えている初心者から見ると、「私」「弟」「テレビ」「見た」という単語しか見えないのですね。「私の弟がテレビを見た」のか、それとも「私は弟とテレビを見た」のか、区別がつかえません。「私の弟だけがテレビを見た」も、「私も弟も、二人とも一緒にテレビを見た」も、「私」「弟」「テレビ」「見た」と一緒の語順なのです。

「日本手話は細かいところと言えない」とよく言われますが、しかしこれは間違いです。「日本手話」では、細かい部分もきちんと区別が付いていて、「私は弟とテレビを見た」と表現したいときは、「私」という主語で、頷くのです。反対に、「私」のときに頷かないと、「私の弟がテレビを見た」となります。このように、「頷き」が助詞にあたるのです。これを習得するのは本当に難しいです。読み取るのも難しいので、初心者には、「私は弟とテレビを見た」も「私の弟がテレビを見た」も同じように見えてしまいます。

それから、「家に絵を描く」と「家の絵を描く」というのも、「家」「絵」「描く」という3つの単語の表現になりますが、「家に絵を描く」ときは、家のほうに描くような動作をします。「家の絵を描く」ときは、家を見るだけ、描く手元の下を見る、というように、「視線、頷き、体の向き」などを巧みに使います。とても難しいことだと思えますが、ネイティブサイナー（手話を母語とする人）は当然のようにできます。

音韻には、本当はもっと文法的な意味が含まれているのかなと思うのですが、語尾を

上げて「雨」と言うのと、語尾を下げて「雨」と言うのとでは、疑問文なのか、そうではないかという違いがありますよね。このように音声言語も、文字で表現できないような部分に、たくさんの文法が含まれています。言語というのは本当にさまざまな要素が組み合わさってできているものなのです。

手話が言語であることの証明について

手話が「言語」であるというのは、言語学者はかなり昔から知っていました。多分、50年ほど前から言っていました。誰も相手にしてくれず、なかなか社会に認めてもらえないという状況がありました。「手話は言語である」と言ったとき、必ず「証拠は？」と言われるのです。そこで「手話には音素があるから、手話は言語である」と説明することになります。

言語を定義付けると「音素があるもの」ということです。音素というのは、日本語で言えば、ほぼ50音に近いものです。例えば、「あ」という音素と、「め」という音素が組み合わさって、「雨」になる。そのような音素がたくさん組み合わさることにより、無限の組み合わせができて、どんなことでも言語で表現できるのです。

「雨」「が」「降る」とか、「雨」「に」「なる」など、意味を持つ最小の言語単位のことを「形態素」と言いますが、それが「統語論」（文が構成される仕組み）、いわゆる文法によって組み合わせられます。「が」「雨」「降る」という順番ではだめで、「雨」「が」「降る」でなければならないというのが文法です。それが手話にもあるので、手話というのは言語なのだ、と言語学者は言っていました。なかなか認めてもらえませんでした。

なぜ多くの方が、手話を言語と認めないのか、ということ、手話を知らない人も、ジェスチャーをするからだと思います。外国に行くと、ジェスチャーだけで通じることがありますよね。ジェスチャーである程度コミュニケーションができてしまうこと、そしてジェスチャーが見かけ上、手話に似ているので、「手話」というと一般的に「ジェスチャー」と同じだと思われるのです。「いや、手話とジェスチャーは相当違うよ」と脳科学による裏付けを示しても、なかなか分かってもらえないということがあります。

仮に、自転車に乗ってどこかに移動するときの脳と、ジムでエアロバイクを漕いでいるときの脳の違いについては、それぞれの脳の写真を見せれば、違いがあることを納得すると思うのです。それが、なぜジェスチャーと手話をしているときの脳の違いでは納得しないのか、というのが、とても不思議でした。

障がいモデルの変遷 — 「医学モデル」から「社会モデル」へ

「障害学」は、障がい当事者が中心になって学ぶ学問です。「障害学」という学問ができた頃から、私はすごく気に入っていて、今も文部科学省などから委託事業を依頼されていますが、事業を行うチームには、必ず、ろう者、盲ろう者などの障がい当事者を入

れることにしています。チームメンバーは、盲ろう者である東京大学の福島智先生や、私が一緒に取り組んでいる日本手話学会のろう者の先生などです。これは本当に大事なこと、私がろう者について一生懸命勉強して話をするよりも、たったの15分間、ろう者の話を聞くほうが本当のことが分かるということは、いつも学生に言っています。これまでは、障がいを持つ当事者が言うことを聞きたくなかった、ということは、世界的にあったと思います。

2001年くらいまでWHO（世界保健機関）は、障がいの分類を、目が悪いか、耳が悪いか、足が悪いか、手が悪いか、というように身体的な機能障害として区分していました。「それでいいのだろうか？」と疑問に思われる方は多いと思いますが、日本の社会は、今もこうした考え方が圧倒的です。

ところが2001年にWHOでICF（国際生活機能分類）が採択されました。これは福祉系の大学では大変話題になり、その頃は、猫も杓子も「ICF」と言っていました。

ICFでは障がいを「社会モデル」で捉えました。これまでは「医学モデル」といって、障がいは個人の能力や機能によるものだと医学的に捉えていましたが、「社会モデル」では、障がいは個人の能力や機能には関係なく、社会の障壁によって作り出されるものと捉えています。病名は関係ないのです。見えないものは、見えない。聞こえないものは、聞こえないのですから。障がいとは、医学的な問題ではなく、当事者の見え方とか、聞こえ方によって、どういうことがバリアになって社会で損しているのかという見方をします。

耳が聞こえないなら、大多数の聞こえる人に合わせて、なんとか聞こえるようにしよう、というのではないのです。そもそも人間には、音が聞こえる人と、聞こえない人がいます。今の社会は聞こえる人を中心にできていて、聞こえない人が不便を感じているので、それをどう改善していくかを考えます。例えば、聞こえない人のために文字の表示を出すとか、手話の通訳をつけるなどの工夫をすることが「社会モデル」の考え方です。

障がいのモデルの変遷 — 「社会モデル」から「言語文化モデル」へ

しかし、さらに世界は進んでいて、「言語文化モデル」というのが、最近出てきました。「社会モデル」では、聞こえない人のために通訳を付けたり、音声言語を文字にして伝えたりします。一方、「言語文化モデル」では、ろう者には文化があり、特有の言語があるなら、それを尊重しようと考えます。つまり、ろう者の言語である「日本手話」で、聞こえる人と同じことができなければならないと考えるわけです。

それで私は、ろう者の先生方を集めて手話で授業をするコースをつくりました。法学はろう者の弁護士に担当していただき、ろう者の経済学者、ろう者の言語学者などにも集まっていただきました。どうしてもマイノリティですから、なかなか大きな組織にはなりません。でも、関東全体から聞こえない受講生が集まってきてくれています。

この「言語文化モデル」とはどういうことかということ、2001年に国連総会で発案され、

2006年に採択された「障害者の権利に関する条約」の第24条3(b)に、「手話の習得および聾(ろう)社会の言語的な同一性の促進を容易にすること」とあります。つまり、言語的な同一性を守らなければならないということです。第30条4にも、「障害者は、他の者との平等を基礎として、その独自の文化的および言語的な同一性(手話および聾(ろう)文化を含む。)の承認および支持を受ける権利を有する」とあります。この障害者の権利条約は、ICFと同じように発達してきました。これは障がい当事者の意見を聞くことで、つくりあげられてきた考え方です。

それが2006年に国連で採択されましたが、なんと2014年まで日本は批准しませんでした。なぜなら、法律が違反してしまうので、批准するならまず法の整備をしなければならなかったからです。それで、まず「障害者基本法」を修正し、「言語(手話を含む)」と規定し、手話の言語性を認める法律を整えました。手話は言語として守られるべきだということで、基本法をつくり、差別解消法もつくり、それでやっと「障害者の権利に関する条約」を批准したのです。

日本手話は少数言語の一つ

ここまでお話ししたのが世界的動向で、障がいとはICFのいう「社会モデル」が定義する通りです。障がいは、医学的に定義されるものではない、ということは「言語」という視点から見ることでも明らかになります。つまり、手話を母語とする人は、少数言語を母語とする人と同じです。昨年ワルシャワでヨーロッパ言語権の会議に出席しましたが、私以外の人はヨーロッパの方ばかりでした。そこでは、ほとんどの先生方が、「日本手話」が少数言語であることを理解されていて、本当に驚きました。

ヨーロッパでは今、少数言語の通訳者が少なく、移民や難民が損をしているということで、手話通訳者を大学院レベルで育てたり、少数言語の学科を大学院レベルで設置したりしています。例えば、ダリー語学科をつくって、通訳者を養成しています。ダリー語とは、アフガニスタンの難民の方が多く用いる言語で、アフガニスタンの中では一番多く使われている言語です。

以前、外国語の運用能力を測る国際基準CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠)が、大学入試の英語試験の指標になるということで話題になりました。しかし本来注目されるべきことは、CEFRの精神が少数言語を大事にしているということです。その中に手話もきちんと入っています。CEFRでは、英語だけではなく、手話を含むその他の少数言語もすべてひっくるめて、言語能力をどう測るかの基準が統一されています。日本では英語だけに偏りがちですが、本来なら、英語以外のすべての言語能力を測れる指標が必要なのだと思います。

脳科学による手話が言語であることの証明

今までお話ししたようなことが、なかなか納得してもらえなかったのが、「脳科学」を用いれば、納得してもらえると私は思いました。

1990年代に、fMRI（磁気共鳴機能画像法）やPET検査（陽電子放射断層撮影）によって、手術をしなくても脳活動を調べられるようになりました。それで、手話をしているとき、脳のどこが活動するかを調べてみました。

脳には「大脳新皮質」という部位があり、それが右脳と左脳に分かれています。左脳には言語野があります。右脳には言語野はありません。脳の左側だけに言語をつくる部分があります。右脳は空間認知やジェスチャーを行うことが得意です。ジェスチャーは右脳が得意なので、当然、手話も右脳が担当していると一般的には思われていました。ところが研究が進むうちに、手話で話しているときは音声で話しているときに働くのと同じ部分である左脳が活動していることが分かりました。ジェスチャーと同じように両手が動いているのに、とても不思議です。

それがなぜなのか、よく理解していただくために、アメリカで発見された、右脳損傷のろう者であるブレンダさんの事例を出したいと思います。

右脳損傷の人にはよくあることなのですが、生活の中で、左側にあるものをすべて無いように感じて無視してしまう「半側空間無視」という現象があります。「自分の部屋を思い浮かべ、インテリアのレイアウトを積み木でつくってみて」と言うと、左半分が世界からなくなったようなものをつくります。絵を描いていても、現物を見て描いているのに、右半分にあるものしか目に映らないのです。食事をするのも、右側にあるものしか食べません。

このブレンダさんも、そうした状況だったのですが、手話で話し始めた途端、目の前にあるものを180度、間違えることなく認識できるようになったのです。左側を認識できない人だと思っていたら、急に認識できるようになったので、「治っちゃったの?」と思ったら、実は手話をやるときだけ空間認知能力が正常になっていたのです。ということは、右脳が担当している空間認知能力が、手話のときだけ左脳にスイッチしていたということです。つまり、左脳の言語野で空間認知を言語として扱っているということで、手話をやっているときだけ空間の認知能力が戻るわけです。右脳は相変わらずダメージを受けて麻痺しているのですが、手話を使う時だけそれができたということですね。

そうした研究から、手話が脳の言語野を使って、音声言語と同じ仕組みで生成されるものだということが分かりました。

そしてアメリカでは、親が聴者で、口の動きを読み取るように育てられたろうの子どもの脳は、左脳に言語野ができていないことが分かりました。右脳と左脳に差のないまま、大人になってしまうのです。聞こえる子は、当然左脳に言語野ができます。でも、ろうの子は、言語野がきちんとできません。口の動きを見ても、言語として獲得できていなかったわけです。ところが、親がろう者で、手話だけで育った子は、左脳に、きちんと言語野が発達していることが分かりました。これも手話が言語であるという大きな証拠だと思えます。

顔の認知

冒頭に、「表情、指さし、視線」というものが、言語的な記号になるということを少しお話しましたが、顔の認知についてはどうなのでしょう。表情が言語として使われるのなら、もしかしたら先ほどのブレンダさんも一般的な表情、怒っているのか笑っているのかは理解できなくても、手話の一部である表情は分かるのでしょうか。例えば「日本手話」では、疑問のときは眉毛をあげるので、同じ手の動作をしていても、それが疑問かどうか分かります。

音声言語で「雨？」（語尾を上げる）と言えば、「雨が降ってきたの？」という疑問の意味を表すのと同じように、手話では眉毛を上げれば疑問形になるという規則があります。そうしたものは言語機能なのだろうか、というのも最近だいぶ分かってきました。どうやら、表情が言語機能であるときには、脳は感情的な表情を判断するときと違うシステムで理解しているらしいと分かってきました。ちょっと遊びみたいなものなのですが、次のイラストを見ていただきたいと思います。

ここにいくつかの図形（三角、丸、細長い四角）がありますが、これをじっと見てください。では、イラストを隠します。さて、今、どのような図形がそれぞれいくつあったか、お分かりでしょうか。思い出すことは、なかなか難しいのではないのでしょうか。

次に、こちらのイラストではどうでしょう。こちらでは、そのような図形がいくつあったか、分かりやすいですね。眉毛として細長い棒が2つ、丸い目が2つ、三角の鼻が1つあったことも覚えてますね。



この実験で分かるのは、人間には顔を認知するシステムが備わっているということです。人間の顔のパーツは、パッと見るだけで脳が理解するのです。当初は顔を見慣れているから分かるのだと思われていたのですが、そうではなく、DNAの中に顔を認識する特別な回路があることが分かってきました。つまり、顔を認知するための脳の仕組みがあるということです。

これは、実は音声言語でも同じことが言えます。音声言語と雑音はまったく違うと認識するように、DNAに組み込まれているのです。このことは受け入れやすいと思います。聞こえる人は、ろう者の手話は言語として認めないけれど、自分たちの使っている音声言語なら、すんなり言語だと認めるのです。でも、ろう者から見た音声言語は、「ただの音（雑音と変わらない）」くらいの認識だと思います。お互いさまですね。

音声言語と手話

脳は、雑音か音声言語かの違いを聞き分けられるのと同時に、音声言語の中でも音の微妙な違いを聞き分けることができます。例えば日本人の赤ちゃんに、アップルの「ア」(æ)と、アップの「ア」(ʌ)の発音の違いを聞かせると、脳が「あ、音が違った」と反応するのです。でも、日本語を覚えるにつれて、アップルの「ア」もアップの「ア」も聞き分けられなくなり、同じ音に聞こえるようになります。9、10、11ヶ月くらいの赤ちゃんは、細かな発音の違いが、だんだん区別がつかなくなります。そのようになっていくのは、脳科学的にいうと、言語を習得すると同時に、音声の識別能力が下がるからです。言語の習得は、認知能力がまだ発達していない小さいうちにやっておかないとダメというのは、その辺と大いに関係があるわけです。

左脳には音声言語を理解する部位「ウェルニッケ領域」と、音声言語を生成する部位「ブローカ領域」があります。「ブローカ領域」のあたりに損傷を負うと、話したいことはいっぱい頭の中にあるけれど言葉が出ないという症状が現れます。伝えたい単語ではないものが出てしまい、本人はとてもイライラし、とても気の毒な失語症になってしまいます。一方「ウェルニッケ領域」をピンポイントで損傷すると、ペラペラと喋れます。「ブローカ領域」が無事なので音声言語を生成することはできますが、相手から何か質問をされても、受け答えになっていなかったり、単語の組み合わせがおかしくて何を言っているか分からなかったりします。例えば「緑の太陽が走った」などと詩のような言葉を発するので、ときどき統合失調症と区別しにくく、非常に診断が難しいことがあります。

そんなわけで、「ブローカ領域」を損傷した人は、手話もまったく同じように生成できなくなります。「ウェルニッケ領域」の損傷が起こってしまったろう者は、自分で手話はできるけれど、相手の言っていることをきちんと理解できなくなってしまいます。音声言語を使う人の場合と、まったく同じようになります。

言語の本質は「音」とは関係ない

言語の本質は「音」と関係ないことを示す非常に興味深い例としてご紹介したいのは、赤ちゃんの「クイーイング」(声出し)です。赤ちゃんは言語を覚えていくとき、生後2、3ヶ月くらいに、意味もなく「クークー」「ウーウー」などと、なんとなく音声言語っぽい音を発します。「オギャー」と泣く声とは、音質が違います。

「オギャー」と泣く声を発するときは、脳の辺縁系というところが働いていますが、これは動物にもあります。犬が吠えるのも辺縁系の働きですが、それとは違い、大脳新皮質で言語らしい音を発するようになるのが「クイーイング」の時期です。それが7～9ヶ月くらいになると、自分の言語にあった音になっていきます。例えば日本人なら、「オッコ」とか「ウック」とか、そういうことを言いはじめます(喃語)。こうして言語の自主トレーニングをはじめているのです。

そうした「クイーイング」が単語となり、単語が意味とつながっていることが理解できるようになるのが、大体1歳前後です。それから2歳までに、「二語文期」といって「ワンワン来た」「おっぱい欲しい」のように、二語文を言うようになります。この段階を経るのは、手話で育つろうの子も、まったく同じです。

手話の「クイーイング」には、4つの主形があります。その後、8～10個くらい出るようになります。大体「アメリカ手話」でも「日本手話」でも同じです。これが、喃語に当たります。音声言語の子が「オッコ」とか「ウック」と言っているところに当たりますが、「日本手話」なら「日本手話」の音素、「アメリカ手話」なら「アメリカ手話」の音素を見ているので、自主トレーニングをはじめるわけですね。それが音声言語とまったく同じ月齢で出てきます。

もっと驚くことに、実は音声言語で育った子も、手話クイーイングをしているのです。クイーイングの4つの音を出しているのですが、周りに誰も手話をやってくれる人がいないと、6～8歳頃までには消えてしまいます。

同じことが、ろうの子にも言えます。ろうの子は聞こえていなくても、音声言語の子と同じように「クイーイング」をします。自分には聞こえていないのですが、「ウーウー」とか「クークー」とか音声を発します。しかし周囲からのフィードバックがないのと、自分自身、周りの大人の音が聞こえないので、消えていくんですね。音声言語の子も、ろうの子も、どちらも同じです。

「コーダ(CODA: Children of Deaf Adults)」という、ろう者の親を持つ聴者の場合、音声言語と「日本手話」を同じように使いこなせるバイリンガルに育つことがあります。これは、本当にDNAにプログラミングされているとしか思えない発達です。音声言語と手話がまったく同じように発達します。音声言語と並行して、手話が母語になります。これは、手話が言語であることの証拠にもなると思います。

指さし（代名詞）を間違えるのは言語である証拠

聴者の子の「指さし」とろうの子の「指さし」は、途中まで同じように発達しますが、ろうの子では、途中から完全に代名詞になっていく、という話があります。

例えば、「自分はこっち（自分に指さしをして）、相手はこっち（相手側に指さしをして）」とするのは当然なのですが、ろうで手話を覚えていく子は、ある日突然、逆に指をさして間違えるようになります。自分をさすべきときに相手をさし、相手をさすべきときに自分をさして、「あ、間違えた」と指を戻すのです。これはとても不思議です。昨日まで間違っていなかったのに、ある日突然、間違いはじめるのです。

これは、「指さし」が代名詞になっているからで、よく英語を話す子が自分のことを「you」（あなた）と言う時期があるのと同じです。「Daddy calls me.」とするべきところを、「Daddy calls you.」と、自分が呼ばれたのに「you」と言ってしまうのです。それで親に「meでしょ」と直されて「あ、そうか」と気付きます。お母さんが「you」と呼ばれるときもあるし、自分が「you」と呼ばれるときもある。また、「おかあさんは自分のことをmeと言うのに、なぜ僕もmeになるの？」と。「you」と「I」は人間関係が関わってくる言葉で、関係性によって表現が変化します。それと同じことが手話にもあるから、ある時期、自分のことを指さしするべきときに、相手を指さしてしまうことがあるのです。この時期には、「指さし」は単なる「指さし」ではなく、「代名詞」になっていると言えます。ここからも、手話が言語であるといえます。

時間となりましたので、本日はここまでにさせていただきます。

細井（司会） 斉藤先生、どうもありがとうございました。続きまして、細野先生に、本学で2010年度からいかに「日本手話」の授業をつくり上げてきたか、事例報告をしていただきたいと思います。

事例報告「言語科目における日本手話—10年のあゆみ—」

細野 昌子（立教大学全学共通科目兼任講師）

手話の社会的位置付け

今、斉藤先生から、「手話は言語である」ということは脳科学的にも証明された、とお話いただき、力強く感じております。

まず、今日の事例報告の中での用語定義をさせていただきます。「ろう者」を、「日本手話」を主なコミュニケーション手段とする集団、次に「軽度難聴者」を、音声日



細野 昌子

本語を主なコミュニケーション手段とし、成長段階で手話に出会い、習得する可能性がある集団——彼らの特徴としては、音声言語を身に付けたあと手話に出会うので、「日本手話」とは文法が異なる「日本語対応手話」を獲得するケースが多いということがあります——そして「聴者」を、音声日本語を主なコミュニケーション手段とする集団、とします。

まず、手話の社会的位置付けですが、斉藤先生からもお話がありましたとおり、手話が研究され始めたのは、かなり昔のことです。そのきっかけは1960年、アメリカの言語学者ウィリアム・ストッキー (William C. Stokoe) が、“Sign Language Structure” という論文を発表したことです。しかしながら、世界的に手話が言語として認知されるのは、2006年、国連の障害者権利条約に「手話が言語である」と明記されるまで待たなくてはなりません。日本でそれが認知されたのは、5年後の2011年のことです。改正障害者基本法で、「言語に手話を含む」と規定されました。その1年前の2010年に、立教大学で日本手話の授業が始まっています。

立教大学の日本手話授業の特徴

ここでまず、全カリの言語教育の理念を振り返ってみたいと思います。「異文化理解を深め、さまざまな人々とのコミュニケーションを可能にする、言語運用能力の習得を目指す」とあります。この理念に基づき、立教大学の「日本手話」の学びは、「手話実技」と「コラム（関連事項の情報提供）」の2本立てとなっています。技術と知識習得を同時に行うことで、相乗効果があげられます。これが特徴の1つです。

2番目の特徴としては、「チームティーチング」があります。チームというのは、ろう講師と聴講師によるものです。ラグビー日本代表のスローガン「ONE TEAM」は、今年の流行語大賞に選ばれましたが、立教大学の「日本手話」の講師陣は、まさに「ONE TEAM」の精神をモットーに取り組んで参りました。

具体的には、ろう講師が実技指導を担当し、絵やイラストなどの視覚的な教材でイメージを伝えながら、インタラクティブに授業を進めていきます。「ダイレクトメソッド」という、手話を手話で教えるというやり方です。それとともに、コラムの説明もろう講師が担います。一方、聴講師は何をするかというと、コラムや必要に応じての読み取り、および表現の通訳を行います。それとともに、コラムは時間が限られるので、いろいろな配布資料を作成し、情報を提供することもやっています。

読み取り通訳については、履修生の読み取り力を伸ばしたいということで、受講生全員に向けて行うクラス通訳から、必要な学生に限定して行うウィスパリング通訳に、早めに変更しています。変更する時期は、「日本手話1」の授業の8回目くらいを目安にしています。

特徴の3番目は、「オンラインシステムによる動画配信」です。授業では、テキストは使いません。レジュメを配布し、それに基づいた復習用動画をメディアセンターの協

力のもと、配信しています。2016年からは、スマートフォンからもアクセスできるようになったので、アクセス数が増えています。

配信している動画内容は大きく2つに分かれますが、学内公開のほうはレジュメに沿った「復習用動画」です。一方、非公開、つまり履修生限定動画では、テスト用語彙、基本語彙〔都道府県、指文字（五十音）、アメリカ手話の指文字（アルファベット）など〕、およびクラス内でのグループ発表をアップしています。

さて、そのほかの特徴ですが、1学期に1人、ろう者のゲストスピーカーをお招きしています。コラムに沿ってご講演いただいておりますが、専門分野の多角的情報を吸収できる機会、そして講師以外の手話にじっくりと触れ合う機会になっています。

また、日本手話独自の「コメントシート」をつくっています。コラム、実技、その他に関する感想、質問、それから参加した手話イベントなどについても、学生に記入してもらっています。この回答はまとめてクラスで配布し、クラス全員で共有します。「コメントシート」は、疑問点の解決（Q&A）や、講師陣による履修生の状況把握に役立っています。また、クラスメイトの情報も共有できるので、クラスに一体感が生まれます。以上が、立教大学「日本手話」の特徴となっています。

授業の組み立てと「日本手話1」の概要

さて、ここからは授業の組み立てのお話になります。

「日本手話」は1～4のレベル別、学期制で行っています。週1回の2年コースです。定員は「日本手話1、2」が25名、「日本手話3、4」が20名で、希望者が多い場合は抽選になります。

立教大学には池袋と新座の2つキャンパスがありますが、2つのキャンパスで年間を通して1～4の授業を行っています。例えば、池袋で「日本手話1、2」を行うときは、新座では「日本手話3、4」を、翌年はそれを逆転するという形でやっています。

授業の時間配分ですが、コラム15分、実技70分、語彙テスト10分——この10分には、次回のテストのための導入も含まれます。それから、コメントシート5分となっています。これが大体の流れです。

では、具体的にどのようなことをやっているかを紹介したいと思います。授業は全14回ですが、14回目は総合テスト（期末テスト）になっているので、実際の授業は13回です。

「日本手話1」では、手話の語彙構成である音韻の意識を高めてもらっています。手話の音韻というのは、「手の形・位置・動き」の3要素からなっています。少しご紹介すると、まず「行く」という手話は、手の形は人差し指1本を下に向けます。位置は、胸の前です。動きは、手前から向こう側にはじくようにします。手の形は同じで、動きを、向こう側から手前にはじくようにすると、「来る」という手話になります。このように視覚言語である手話の音韻を意識しながら、語彙を紹介することから始めます。

目標は挨拶や自己紹介ができるレベルを目指しています。そのために、語彙としては家族、時間、住所、出身など、身近なものを紹介しています。それとともに、もう一つの目標レベルとして、全国手話検定試験5級合格を目安としていますが、これは最終的な目標ではありません。コラムは、ろう者の文化・生活・スポーツなどを紹介しています。

授業の5回目と12回目にグループ発表を行います。グループ発表の準備をすることによって、クラスの一体感を高めています。

「日本手話1」を修了する頃の受講生からのコメントシートをご紹介します。

- ・最初は目が疲れたが、ろう者の表現力の豊かさに魅了された。
- ・手話は必ず目を合わせて会話するので、コミュニケーションしやすい。

初めての視覚言語である手話との出会いの様子が、コメントによく表れています。

また、コラムに関しての感想では、

- ・この授業でろう者の気持ちや文化を初めて理解し、ろう学生との誤解が解消された。というコメントもあり、文化的な理解も進んでいるようです。

「日本手話2」の概要

「日本手話2」では、理解言語を使用言語に発展させていきます。手話で表現されたことを大体読み取れるようになった後でも、自分で手話を使っていくには、もう少し時間がかかります。そこを実際に使える「使用言語」にしていくのが、「日本手話2」です。目標レベルの目安は、全国手話検定試験4級です。検定試験用の語彙テストがスタートするのも「日本手話2」です。

コラムでは、ろう者の職業について学びます。法の壁や就労時の問題点などの概説を行い、そのあと、実在する国内外のろう者の紹介をしていきます。

イベントでは、クリスマス会を行います。全員が司会、歌、劇などの係や出し物を担当し、手話でのクリスマス会をみんなでつくり上げます。毎年、とても盛り上がります。

「日本手話2」のコメントシートを紹介します。

- ・親戚のろう者と手話で会話が進んだ。
- ・バイト先で手話で話し、ろう者に喜ばれた。

そして、

・コラムで、情報保障があれば、聴者と同様にろう者も社会で活躍できると分かり、自分も将来職場で出会ったら助けになりたい。

というコメントもありました。こうした目標が持てれば、手話をはたかかって身に付けるというモチベーションにつながります。つまり、冒頭で申し上げた実技とコラムの相乗効果が現れている一例です。

「日本手話3」の概要

「日本手話3」から本格的な文法の学習を行い、レベルアップをしていきます。例えば NMM（非手指標識）ですが、眉、頭、首などの動きの要素が、文法的な役割を果たします。一つ例を挙げてみます。先ほど「行く」という手話を音韻のところで紹介しましたが、この手話に「眉上げ」「顎引き」を加えると、「行く？」という「イエス・ノー」型の疑問文になります。また NMM とは別に、気持ちから出る表情が加わってきます。音韻と NMM、それと表情を加え、学生たちは学んでいくこととなります。そのほかにも手話口型や構文など、いろいろな文法項目を導入しています。

目標レベルとしては、ろう者が使う自然な手話技術——そこには文法が必ず必要になりますが——その習得を目指しています。全国手話検定試験3級を目安としています。

コラムは、ろう者の歴史、教育、法律、福祉制度と、盛りだくさんです。これには理由があります。全国手話検定試験2級には筆記試験があり、それは10月に行われます。すると「日本手話4」で、9月末から勉強を始めても間に合いません。ですから「日本手話3」の段階で、コラムをたくさん紹介して学びを充実させています。

「日本手話3」は、「日本手話1、2」と比べて、文法的にもコラムの内容にしても、高いハードルを設けています。ハードルが高いからこそ、学生たちが「一緒に乗り切ろう」と団結します。

以下、コメントシートの抜粋になります。

- ・文法に則り、自然な「日本手話」表現に近づけた。
- ・読み取り力がアップした。講師の表情だけで内容が分かる。
- ・バイト先の子どもたちに意識的にさまざまな表情をするようになった。

これらを読むと、NMMの習得が進んでいることが分かります。この習得は手話の範疇に限らず、一般的なコミュニケーション能力アップにもつながっています。

「日本手話4」の概要

では、「日本手話4」の解説に移りたいと思います。「日本手話4」では、手話の特徴的文法の習得を目標としています。これもなかなか難しいところではありますが、「日本手話」ならではの慣用句、および CL（Classifier: クラシファイア）を学びます。CLは「形、動き、特徴」などを、手話の中に取り入れて再現する技術です。イメージ的にはパントマイムのようなものですが、「日本手話」の CL には文法があります。これが大きな違いです。そのほかにも、ロールシフトという、話者が複数の人の役割をする手話文法ですが、これは音声言語でいうところの声色です。手話では視覚的に表現していきますが、それを技術として身に付けます。

「日本手話4」では、今まで申し上げた手話文法を活用して、自由に自己表現ができるようになることを目指しています。目標とするレベルの目安は、全国手話検定試験2

級です。

コラムでは、言語としての手話、ろう者の芸術など、いくつか項目を取り上げて紹介します。2年間の総まとめということで、受講生それぞれの中の「ろう者像」を考える時間もついています。

「日本手話4」は最終レベルですが、この内容を習得するには、かなり時間がかかります。文法を柔軟に使いこなせるように学習を進めていきます。そして10回目では手話による絵本読み聞かせを、12回目ではディスカッションを行います。そこで活用できるレベルに成長していきます。

では、「日本手話4」のコメントシートを紹介します。

- ・軽い気持ちで「日本手話1」を受講し、4まで続けた。楽しい思い出がいっぱいで、未知だった手話の世界を、今では身近に感じる。出会ったろう者全員の明るさとパワーに魅力を感じている。今後も学習を継続したい。
- ・手話を勉強できたことは財産になった。就職先でも手話を生かせるようにがんばりたい。
- ・「日本手話」1～4を通し、ろう者から手話を学び、文化も理解することで、障がい者への偏見が消え、新たな視点を発見できた。

というように、2年間の実りが感じられるコメントをいただいております。

評価方法について

さてここからは、評価方法について解説していきます。評価項目の割合は、授業参加40%、期末テスト40%、レポート20%です。期末テストの内訳は、読み取り30%、表現テスト10%です。

成績表には、授業への参加度、期末テスト、レポート、それらの合計、イベント参加、検定試験についての評価を記入する欄があります。期末テストについては、まず「読み取り」ですが、単語・短文・会話文の記述問題があります。「日本手話4」では、パッセージも読み取ってもらっています。「表現」は、既習語彙、文法項目を使った90秒のスピーチを、「日本手話4」では120秒のスピーチをしてもらっています。

検定試験の評価項目は、音韻、文法・NMM、語彙の正確性です。

レポートは既習コラムからテーマを選択し、2000文字程度のレポートを課しています。レポートは、テーマの選択理由、研究、自分の見解、という3項目で評価をしています。

こちらのグラフは池袋キャンパス「日本手話1～4」の履修生の〈2012→2013年、2014→2015年、2016→2017年、2018→2019年〉の評価結果を比較したものです。縦軸に成績評価S(90点以上)をとった学生を4点で、A(80点台)の学生を3点、B(70点台)を2点、C(60点台)を1点として比較しました。

平均値を見ると、「日本手話1」から「日本手話4」とレベルが上がるにも関わらず、成績評価は緩やかな下降にとどまっています。これがなぜなのか探してみると、例えば

クラスのニーズに合わせた授業運営や学習の選択肢拡大、また動画配信の効果、クラスの連帯などがうまくいっているのではないかという結論になりました。この「クラスのニーズ」というところで申し上げますと、ニーズを正しく把握するために、必要に応じて実技に関するアンケート調査を行うことがあります。以前「日本手話3」でアンケートを取ったところ、「アウトプットと復習が少ない」という意見が多く見受けられたので、7回目の授業からは、「アウトプットと復習」の時間を多めに取れるよう、微調整をしながら授業を進めました。

全国手話検定試験と学びの場を広げる工夫

さて、学習の選択肢の話に進みますが、全国手話検定試験は大きな役割を担っています。検定試験の受験は任意で、必須ではありません。どういう学生が受けるかというと、手話サークルのメンバー、情報保障支援学生など、もともと、ろう者や手話に興味がある学生です。それに加え、教員、公務員、CA（客室乗務員）といった職業への就職を考えている学生が、受験をするケースが多いようです。

今までに、延べ70名近くの合格者を輩出しています。2012年・2013年・2015年には、1級の合格者が出ています。最終目的を2級合格としているにも関わらず、1級の合格者が出てるのは、どういうことなのかと調べてみると、親戚や親友にろう者がいて、モチベーションを高く持てたために、1級合格に結び付いたということでした。

さて、立教大学では、秋学期の終わりに、言語科目の履修者に対してアンケート調査を行っています。

授業に取り組む姿勢や授業内容に関して20の質問に答えてもらうのですが、例年大変よい結果となっています。しかしながら、年によって多少の差があるので、分析をしてみました。

授業への参加度や運営等については高い評価を受けていますが、「毎日の予習や課題を欠かさずにこなしていた」、「毎日の授業の予習復習にあてた時間」、「授業の教材以外でその言語を学習した」の回答結果はあまりよくなく、とくに最後の設問は懸案になっており、解決していかなくてはなりません。

そこで、改善策を考えてみました。究極的には、学習場の拡大が必要かと思っています。例として、オンラインシステムを利用したオンライン課題や、練習問題をつくるのが必要だと思っています。また、モチベーションの高い履修者のために自主学習用教材の開発をしていこうという意見もあります。授業内でもオンライン動画を利用し、アクセスの習慣化を促すことも効果があるかと思っています。少し見方を変えて、学習の動機付けの多角化にも取り組んでみたらどうかという考えもあります。

また、実は今学期（2019年秋学期）に試していることですが、全国手話検定試験や、授業以外での手話やろう者との出会いを評価対象としています。これは学生たちが忘れた頃にも、繰り返しPRしています。「ろう者のイベントに参加しましたか？評価しま

すよ」などと言って、促しています。結果はまだ出ていませんが、効果があるといいなと思っています。

立教大学に日本手話コミュニティをつくる

さて、本日のお話の最後のテーマに「立教大学の日本手話コミュニティ」と大きく出しましたが、これはどういうことかという、私たち講師陣は、ただ手話を教えているのではなく、立教大学において手話のコミュニティをつくっているという意識があります。

ここで改めて「日本手話」クラスの構成を振り返ってみたいと思います。クラスを構成しているのは、聴学生と聴覚障がい学生です。聴学生というのは、初めて手話に出会う学生がほとんどです。講義に関わった聴覚障がい学生は2010～2019年まで、コミュニティ福祉学部、文学部、現代心理学部などに所属している学生で、年間1人～複数人でした。

「日本手話」のクラスは、聴学生にとっては、異文化・異言語を体験し、多角的な視野を広げる機会になり、聴覚障がい学生にとっては、これから社会に入っていく事前経験をする場になるでしょう。それとともに、いつもは支援を受けている側ですが、クラスの中では、ネイティブサイナーとして自分が表現することによって、クラスに貢献できるということで、自信につながると思います。つまり、両方の立場の学生がいるからこそ、お互いに成長しあえるのが「日本手話」クラスです。

その他にも、講師たちはこのクラスを拠点として、学内でもさまざまな活動をしています。例えば今日、しょうがい学生支援室のスタッフの方もいらっしゃっていますが、毎年、しょうがい学生支援室主催の「バリアフリー講座」が開催されています。これは立教大学の教職員および在籍学生のための啓蒙講座ですが、「日本手話」の講師も毎年講座を担当させていただいています。また、手話をテーマにした論文のアンケート調査協力やアドバイス、学園祭の手話関係行事のアドバイスなども行っています。クラスだけに留まらない、こうした学内活動をもっと広げていけたらいいなと思います。

さて、まとめになりますが、全学共通カリキュラムの言語教育の理念を鑑み、「日本手話」とは何か、ということを考えてみました。

まず「異文化理解」という理念では、手話やコラムを通して、聴学生がろう文化という異文化と視点を共有し、人生に新しい見方を構築することが挙げられます。また、ろう学生、軽度難聴学生も、異なる視点から改めて手話と出会い、アイデンティティを確立するということができるかと思っています。

もう一つの理念である「言語運用能力」は、「日本手話」の授業で培ったコミュニケーション能力を、卒業後も必要な場面で発揮できる力を育む、ということになるかと思っています。過去10年間、いろいろ経験をしながらノウハウを構築してきましたが、今後はさらなるレベルアップをしていきたいと考えています。立教大学の関係者の方々は、

「Blackboard」(Web ブラウザを利用した教育支援システム) から、先ほど紹介した動画にアクセスできますので、ぜひ訪問してみてください。本日はご静聴ありがとうございました。

細井 (司会) どうもありがとうございました。「日本手話」のクラスの中から学内、あるいは学外へと、学びの場をつなげてくださっていることがよく分かりました。続いて、ネイティブサイナーとして「日本手話」をご指導してくださっている、野崎静枝先生から、授業についてコメントをいただきたいと思います。では野崎先生よろしくお願いたします。

コメント「日本手話の講義から学ぶもの」

野崎 静枝 (立教大学全学共通科目兼任講師)

異文化を知ること、社会に出て役立つ力を身に付ける

引き続きまして、ろう講師の立場から学生に対してできることはどのようなことなのか、ということについてお話しさせていただきます。これまで手話を学んだ学生から、数多くのコメントをいただいています。現役の学生の中には、ろうの学生に対してパソコンテイク、ノートテイクなどの情報保障のサポートをしている学生もいます。また、卒業後にはCAや、病院、郵便局などで勤務している人もおり、窓口で聞こえない人との対応の際に、授業で学んだことを活かして手話や筆談などを使い、相手に合った対応をしているという話を聞きます。それは授業を通してろう者の背景を知ったからこそできることであり、ろう者にも大変喜んでいただけたとの報告を受けるたびに「日本手話」の授業は大変意義のあるものなのだと嬉しく思っております。



野崎 静枝

さらに、ろう学校の教師になった学生もいます。立教大学では「人間や社会のために生かすことのできる能力を持った人材を育てよう」という理念が掲げられています。日本の中に異文化が存在することを学ぶことによって、ろう者や難聴者だけではなく、さまざまな立場の人たちをサポートするためには何が必要なのか——そうしたことを考える力、さらに実際に社会の中で役立つ力を育てていくことが「日本手話」の授業の目的の一つではないかと考えております。

「ろう文化」とは

「ろう文化」とは一体どのようなものなのか。実はろう文化は、世界中に存在するものなのです。『ろう文化の歴史と展望』（2007年 明石書店 / 刊）という書籍の中に、ろう者の文化的価値観は世界中のろう者で共通している部分があると記載されています。その筆者であるイギリス人のろう者、パディ・ラッド博士は10年以上かけて世界各国のろう文化を分析し、1993年に「デフフッド (deafhood)」という言葉を生み出しました。「デフフッド」とは日本語で「ろうであること」という意味です。「デフフッド」の反対語に、「デフネス (deafness)」という言葉があります。これは、「医学的に捉えた聴覚障がい」という意味の言葉です。彼は、「ろう者とは何か」を、ろう者同士が共有する体験から議論し合い、追究しました。そして、聞こえる人たちからの理解を得るために、改めてろう文化とはどういうものなのかについて議論を重ね「聴者とろう者が共に歩むことのできる社会を築くことが重要である」という考えに至ったのです。

『ろう文化の歴史と展望』には、「ろう者とは何か」を追究することを「ある博物館」を訪ねることにたとえて書かれています。博物館の中にはろう者を理解するためにさまざまなものが陳列されています。まず最初に目に入るのが「耳の構造」の図です。聞こえない人たちは、耳の機能のある部分が破損しているために聞こえない、ということが描かれています。ベートーベンの耳が聞こえなかったことは有名な話ですが、ベートーベンが耳にラップをつけて外界からの音を聞き取ろうとしている絵画もあります。聞こえるためには補聴器を使用すべきだということも説明されています。昔の補聴器は箱型で胸に下げるタイプでした。近年では技術の進歩により人工内耳を装着するろう者も増えています。できるだけ聴者に近づけようと医学的な治療を施すことを目的としたイメージのイラストが描かれています。福祉の授業で聴覚障がい者について学ぶときは、このような医学的な視点が入り口になっています。

例えば、生まれた子どもの耳が聞こえないかもしれないと気付いた親は不安になり、病院に行きます。すると医師はこのように説明するのです。「聞こえる人たちに近づけていくための治療をしましょう」と。しかし声が出るように訓練をしたところで、果たして聴者と同じように発語できるかと言えば、非常に難しいことです。それはマジョリティである聴者に合わせた生き方を余儀なくされることにもなるのです。果たしてフェアな世界なのでしょうか。私が聞こえる皆さんに分かっていただきたいのは、このようなことではないのです。扉の向こうにある「ろう者」の世界です。その世界はどのような世界でしょうか。

手話は言語であり、ろう者の誇り

ここにチャールズ・ベアード氏による絵画があります。これはアメリカにあるギャロウデット大学というろう者のための大学のカフェテリアに展示されている大きな絵です。

この絵をパディ・ラッド氏は「世界を股にかけて連帯するろう者であることに喜びを見だし、自分たちの手話に傲然たるプライドを持ち、次世代を担う子どもたちが、手話を用いて思考や感情を伝える練習をしている光景に深い満足を感じる」と捉えています。この絵には、手話は言語であり、ろう者はそのことに誇りを持っている、という思いが込められています。

絵に描かれている人物について説明していきます。まず右の端にいる黄色い子どもが、アメリカ手話で「あなたはデフ（ろう）なの？」と聞き、赤い色の人間が「あなたと同じデフだよ」と言っています。世界中のろう者が、自分と同じろう者に出会ったときと同じ喜びを表現しています。また、深緑色の人物は自分が聞こえないことで落ち込んでいます。その人の肩に手を置いている青い色の人物がいます。この青い色の人物が指さしている先にあるのは何でしょうか？ それは光る手で表現されている「手話」です。手話があれば仲間と深く語り合うことができ、知りたいことがあれば手話通訳を通して知ることができる。青い色の人は深緑色の人に「大丈夫だよ、悲観する必要はない。ほら、私たちには手話がある。手話があれば仲間と深く語りあえる」と語りかけているように見えます。ろう者が聴者に伝えたいことは、ろう者が手話を言語として用い、誇りを持って使っているということ。そして、聴者とろう者がお互いの違いを理解し、人間として尊重し合いながらベストな社会を構築していくことが大切だということなのです。

「ろう文化」を伝える、ろう講師の役割

授業では「日本手話 1～4」の2年間を通じ、主に「ろう文化」と「言語としての手話」という視点から学びを進めています。まず「ろう文化」の中のルールについてお話ししたいと思います。授業では、教室の中にいる全員が目と目を合わせてコミュニケーションをとれるようにアーチ型に席を並べています。もし一人でも私を見ていない学生がいれば、全員が私を見るまで授業を止めて待ちます。そして私が学生と交わす挨拶は、ろう者が使う片手をあげるしぐさで表現をします。最初は怪訝そうな様子の学生たちも、常に私が行う挨拶を見て、自然にろう者の挨拶ができるようになっていきます。これはとても大切なことだと思っています。

さらに「日本手話」の中には音声言語にはない特徴があります。その中の一つであるCLを取り上げてお話しします。CL (classifier) は日本語では分類辞・類別詞といえます。例えば「人さし指のグループ」「五指を開いたパーのグループ」「2指のグループ」「五指を握ったグーのグループ」など、いくつかのグループに分けられています。まず「人さし指」ですが、これは人を表します。両手の人さし指の指先が顔になります。それを向き合わせることで、お互いに向き合っていることになります。人が「行く、来る」を表すときのルールがあります。片方の人さし指を体の手前から向こうに手を動かせば、「向こうに行く」。またもう一方の人さし指を同時に同じ方向に動かすと「ついて行く」、という表現になります。人だけではなく、物、例えば「鉛筆」なども人さし指

で表すことができます。鉛筆が倒れる、机から転がり落ちるなども表現できます。さらに「日本手話」では、両手の五指を握りグーにして自転車の車輪を漕ぐように回して「自転車」を表現しますが、CLの「手のひらのグループ」では、五指を閉じ手刀で「自転車が横切る」、両手の手刀で「自転車が2台で走る」「自転車同士が衝突して転倒する」なども表現できます。バイクも自転車と同様の形で表すことができます。「バイクが勢いよく走り抜ける」「バイクがウイリーする」などと表現します。そして「2指のグループ」では、2本の指が「足」を表します。「人が立つ」「飛び跳ねる」「踊る」「泳ぐ」「ダイビングをする」など、指2本でいろいろな動きを表現できます。CLとジェスチャーを混乱してしまう人がいるかもしれません。しかしCLとジェスチャーには大きな違いがあります。それはCLには一定のルールがあるのです。一方ジェスチャーにはルールなどありません。この違いを理解していただきたいと思います。

さて、ここで皆さまご存知の松尾芭蕉の有名な俳句「古池や 蛙飛び込む 水の音」を用いて「日本語」と「日本手話」の韻律の違いを感じていただきたいと思います。まず、日本語の単語を確認してみましょう。／古い／池／蛙／飛び込む／水／音／。これらの単語を手話で表現してみます。私たちろう者が見ても日本語として美しいということは理解できますが、ろう者にはその情景が心に響いてこないのです。それではCLを用いて表現してみたいと思います。まずは俳句のなかの情景を頭の中で描きます。静かな山奥の風景を眺めながら大木が立ち並ぶ中を自分がゆっくりと歩いています。岩から蛙が池に飛び込みます。するとその水面に蛙が飛び込んだ時にできた波紋が静かに外に向かって広がっていきます。そして蛙がゆっくりと泳いでいく様子を表現します（野崎、日本手話で俳句を表現する）。いかがでしょうか。細やかな情景を目に見える形で表すことができます。私が以前所属していた劇団の団長がこの俳句を表現してくれたことがありました。それを見たときに鳥肌が立つほどの感動を覚えました。初めて日本の文学の素晴らしさに触れた想いになりました。

今日は短い時間でしたが「日本手話」の奥深さについて少しでも理解していただけたら大変嬉しく思います。最後になりましたが、立教大学で日本手話を担当して8年になりますが、私自身も大きく成長させてもらっています。今後もさらに一人でも多くの学生に手話を学んでいただきたいと思っております。ご清聴どうもありがとうございました。

質疑応答

細井(司会) では、質疑応答の時間とさせていただきますと思います。質問のある方は、挙手をお願いします。

質問者① 学習院大学の1年次生です。斉藤先生に2つ質問があります。1つ目の質問は、手話と音声言語のバイリンガルの手話表現は、手話のみのモノリンガルの方の表



現と、何か違いがあるものでしょうか。2つ目の質問は、手話の韻律は、音声言語の韻律と似ているところがありますか。

齊藤 韻律とは、詩などのプロソディのことですか。

質問者① はい、そうです。

齊藤 まず1番目の質問に関しては、コーダの人が手話を話すときは、手話のモノリンガルの人と違うかということですが、ろう者にモノリンガルはほとんどいないのです。

ろう者は誰でも、頭の中に多少は日本語があります。それは読み書きができるからです。少なくとも、日本では読み書きは必ず教えられてしまうので。とくに大学にはいません。学校教育を受けてしまうと、モノリンガルにはなり得ないのです。だから聞こえない人でも、音声日本語に影響されている人もいれば、コーダだけれど、手話をするときには完全にスイッチを切り替えて、音声言語に引かれない手話を話す人もいます。

ろう者であっても、音声で話し始めると、日本語音声話者としてネイティブであるという人もいます。ですから、聞こえているか、聞こえていないか、ということは、言語表現によって、必ずしもはっきりと分かるわけではないのです。

それから、2つ目の質問、手話と音声言語の韻律は似ているところがあるかどうかということですが、まったく違います。実はこれは大きな問題です。

ろうの方々に向けて、手話コーラスというのがありますよね。よく、はやりの歌に手話をつけていますが、これを嫌う人は、実は多いのです。ものすごく怒る人もいます。多くの人に手話を知ってもらおうという意味ではいいかなと考える人もいますが、音声日

本語と「日本手話」の韻律が違うので、とても変なのです。ちなみに、私の勤務先である日本社会事業大学のホームページを見ていただくと、「聴覚障害者大学教育支援プロジェクト」というページに「校歌手話動画」が出てくるのですが、一般の学生が歌うのとは別にしてあり、音は出していません。音声の歌と合わせると韻律が合わなくなってしまいますからです。この動画を撮影した際には、手話を実演してくれたらう者に、「この校歌を日本手話に訳して、あなたのリズムで、美しく語ってほしい」とお願いしました。

日本語を英語に訳すときもそうですが、ニュアンスなど本当のところは、なかなかうまく伝わらないですね。日本手話でも、独特の五七五みたいなリズムがあると聞いていますが、野崎先生、いかがでしょうか。

野崎 そうですね。日本語の場合は「五七五」などのリズムがありますが、手話の場合もリズムは確かにあります。そのリズムに合わせて手話で歌うと、ろう者が楽しむことができます。例えばクリスマスの歌がありますよね。それも、ろう者独特のリズムに手話をあてはめて歌えば手話の韻律を活かすことができ、楽しめると思います。

質問者② 世の中には、DVD など、手話の学習用ソフトがたくさんありますが、そうしたソフトをどのように評価されていますでしょうか。とくに、ここが足りないとか、もう少しこうしたことが必要ではないか、ということがあれば、お聞かせください。

斉藤 私だったらこれを推薦するというのがあります。学習用ソフトでもいろいろありますが、例えば、手話検定対策ソフトは、やはり単語を覚えることに重点が置かれています。ろうの方たちが思い入れを持ってつくったものでは、先ほど野崎先生がおっしゃったようなCLを重視したものもあります。「手話の極意」というDVDは、それこそ「眉上げ」「顔き」やCLなど、そうした表現にフォーカスしていますが、用途によって選ぶといいと思います。

細野 いろいろな教材がありますが、やはり個性、個差がかなりあります。さまざまな手話表現を見るという意味では、たくさんの教材に触れることに意義があると思います。授業でもDVDを使っています。それは野崎先生の手話だけではなく、いろいろな方の手話に慣れるという目的で使っています。

質問者③ 一般の参加です。聴者が手話を学び続けるのは、なかなか難しいことだと思います。今、立教の学生の皆さんの中で、手話の学習を続けている方は、たくさんいらっしゃいますか。

野崎 卒業後も手話の勉強を続けている学生もいます。手話通訳士を目指すため卒業後、国立障害者リハビリテーションセンター学院の手話通訳学科に入学した人も3名い

ます。その中の1人は、手話通訳としてある企業に採用され、現在ろう者の職員と一緒に働いています。このことは、とても喜ばしいことだと思っています。また社会福祉協議会などで活躍している人もいます。実は先日、郵便局に勤務している卒業生から報告を受けました。ろう者のお客さまが来局し、手話ができる職員がいるということで大変喜ばれたそうです。さらに「この局は家から遠いけれど、あなたがいるのでこれからも通うわ」と言ってくださったそうです。「日本手話」の授業がこのように役立っているということは、私としては大変喜ばしいことです。

細野 もう一つ付け加えますと、2年前の卒業生ですが、就職が決まって、同僚にろう者がいることが分かって、とてもモチベーションが上がったと言っていました。そうしたことをきっかけに、手話の学びを継続している人はいるのではないかなと想像しています。

質問者④ 立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科で学んでいる者です。お三方のご意見を伺いたいのですが、ろう者とのコミュニケーションツールとして、手話以外にも、筆談や口話、スマホやタブレットなどを活用することもあるかと思います。さまざまなツールがある中で、やはり手話がコミュニケーションツールとして一番と思われるお話があれば、お教えいただけますでしょうか。

斉藤 簡単に言語学的に言うと、文字や筆談というのは、Eメールができてろう者には有利になったと思いますが、我々ネイティブスピーカーであっても、文字にすると誤解がたくさん生じることがあります。メールで喧嘩になったという話もよくあります。やはり面と向かって話すのと、文字だけでコミュニケーションを行うのでは、情報量がまったく違います。文字には音の高低も間もなく、情報量が少ないのです。そうした意味で、ろう者のネイティブ同士は、やはり手話で話したほうが圧倒的に正確に伝わるので、言語学的にはいいと思います。手話のほうが、文字よりも情報量が圧倒的に多いということです。

細野 例えば、私たちがアメリカに留学して、英語をかなりのレベルまで話せるようになったとします。英語の学習がある程度進んだとしても、日本人に会って日本語で話したとき、すごくホッとすると思いませんか。そこには、言語が持っている文化的なものが心に伝わるのだと思います。それと同じように、ろう者にとっての生きる糧というか、生きるエネルギーになるものが、手話という言語なのではないかなと私は感じています。

野崎 手話は、やはり顔を見ながら話すので、微妙なニュアンスや言いたいことも表情から読み取ることができ、本当に言いたいことが掴みやすくなります。文字だけだと、感情の起伏が読み取れず、細かな心情も掴みにくくなります。それを掴むためには、お

互いに日本手話で話すのが一番です。

例えば、ディベートをするとき、聞こえる人同士がディベートして、そこにろう者が1人、入ったとします。すると、聴者とろう者とでは、どうしても情報量に差が生じます。聴者が日本語のリズムに合わせて手話をしていても、ろう者には伝わらないんですね。英語を話す人の中に、日本人が入っていくようなものです。やはり一番伝わりやすいのは全員同じ言語を共有して話すことではないかなと思います。

斉藤 付け加えますと、外国語が理解しにくいというレベル以上に、ろう者には物理的に音がないわけですから、音声言語を文字にしたもので伝え合うということは、そもそも絶対情報量として無理があるということです。

先ほど、手話をずっと続けていくのに、ろう者との出会いがモチベーションにつながるという話があり、立教大学の卒業生の方がそのように手話を続けているのはすばらしいことだと思います。しかし、逆のこともあります。

以前、立教のろう者の学生が、手話で英語を教えてもらうために、探しに探して私が行っている高校生向けの英語塾に来たことがありました。ところがその方は、今はろう学校の先生になって、音声で英語を教えています。この状況を、ぜひ皆さんに知ってもらいたいと思います。日本の大学、学校は、聴者に合わせる社会になっているのです。ろうの子どもを持つ親御さんでも、子どもは音声言語ができたほうがいいと思っています。ろう学校では、子どももろう、先生もろうだから、手話で伝え合うほうが圧倒的に情報量が多く、深く学べるはずなのに、たまに手話もつけるけれど、基本的には声で教えようとしています。でも、子どもたちには聞こえていないのです。これが日本の現状です。日本は、本当に少数言語を守る気があるのか、と疑問に思うことがあります。

細井 (司会) 最後にお一人、どなたか質問のある方、いらっしゃいますか。

質問者⑤ 日本語に合わせた手話の挨拶について、疑問があります。聞こえない人同士で、日本語に合わせた手話の挨拶を使っているのを見たことがありません。ろう者の方が、手話を始めたばかりの人に対して使ったり、職場の上司に対して使う場面は見たことがあります。「おはよう」「こんにちは」などの日本語に合わせた手話の挨拶は、尊重する必要があるのでしょうか。

野崎 学生にも心掛けるように伝えているのですが、実は、ろう者のコミュニティによっては「おはよう (起きる/挨拶)」という手話を使わない場合があります。ろう者間では一般的に“片手を上げる”挨拶表現を使います。中には「こんばんは」「こんにちは」と日本語に合わせた挨拶表現を使う人もいますが、実際には、ろう者同士では夜でも朝でも“片手を上げて”挨拶をするろう者が多いのです。そのことは、学生に伝えています。

ろう者でも、育った環境はそれぞれ違います。ろう文化の中で育ったろう者は、ろう

者の挨拶をしますが聴者の中で育ったろう者は日本語に合わせた挨拶を身に付けています。また地域によっては、日本語の挨拶を使うのが当たり前になっている所もあります。

私の場合は、相手によって日本語に合わせた挨拶と、ろう者の挨拶を使い分けています。例えば、ろう学校で聴者の先生に挨拶するときも、ろう文化を理解していない先生と理解している学生とで挨拶を使い分けています。ろう文化をしっかり身に付けた人であれば、このように片手を上げた挨拶でも構いません。相手との関係性や場の雰囲気を使い分けることが必要だと思っています。

細井（司会） もっとお話を聞きたい、というのが実感ではないかと思いますが、お時間となりましたのでこれにてシンポジウムを終了させていただきます。最後に斉藤先生、細野先生、野崎先生に拍手をお送りください。本日はありがとうございました。